

# Transcription of Letters to Komajiro Sato in the Collection of Historical Materials Related to Dance Held by the Sato Family in Osaka Kita-no-shinchi (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: KASAI, Tsukasa, KASAI, Junichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00061486">http://hdl.handle.net/2297/00061486</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 【史料紹介】

大阪北の新地舞踊関係史料  
—佐藤家所蔵 佐藤駒次郎宛書信（上）—

人間社会研究域 客員研究員

笠井 津加佐

人間社会研究域 客員研究員（本学名誉教授）

笠井 純 一

Transcription of Letters to Komajiro Sato in the Collection of  
Historical Materials Related to Dance Held by the Sato Family in  
Osaka Kita-no-shinchi (1)

Guest Researcher Institute of Human and Social Sciences

KASAI Tsukasa

Guest Researcher Institute of Human and Social Sciences

(Emeritus Professor at Kanazawa University)

KASAI Junichi

**Abstract**

This paper introduces letters in the Sato family's historical materials related to *Haru-no-odori* and *Onshukai* held in Kita-no-shinchi, one of the Osaka *Kagai*. The historical materials belonged to the current owner's grandfather, Komajiro Sato. It was the emergence of historical materials in Osaka *Kagai*, which were thought to have been destroyed by two large air raids at the end of World War II. In addition, the letters date from the end of the Taisho era to the beginning of the Showa era, and are valuable as historical materials that convey the relationship between the culture, artistic activities and *Kagai* developed on a nationwide scale, such as the opening of the Tsukiji-shogekijo, the *Hanayagi-buyokenkyukai*, and the new dance. Hence, these materials may be of interest to a wide range of researchers, particularly in the fields related to culture and society. Due to the number of characters, we introduce them into two parts. This study provides an overview of the historical materials, and then introduces letters from those involved in the Hokuyo Naniwa Dance.

**Keyword**

Kita-no-shinchi in Osaka, NAKARAI Tosui (半井桃水), OKA Onitaro (岡鬼太郎), TANAKA Ryo (田中良), TOYAMA Shizuo (遠山静雄), KIMURA Tomiko (木村富子)

## 【史料紹介】

## 大阪北の新地舞踊関係史料—佐藤家所蔵 佐藤駒次郎宛書信(上)—

人間社会研究域 客員研究員

笠井 津加佐

人間社会研究域 客員研究員(本学名誉教授)

笠井 純 一

## 要旨

本稿は、大阪北の新地で行われた春の踊や温習会に関わる、大正末期から昭和初期の書信を紹介するものである。全て北の新地の経営者であった佐藤駒次郎が受信したものであり、大阪大空襲で湮滅したと考えられてきた大阪花街の史料として希少価値を持つだけでなく、築地小劇場、花柳舞踊研究会、新舞踊運動など全国規模で展開された文化・芸術活動と花街の関りを伝えるものとして貴重である。演劇・舞踊・文学・美術・音楽などの文化と、社会との関係を考えるための史料として、広く公開したい。紙数の関係から上下二回の掲載を予定している。本号では、史料所蔵者と史料の概要を述べたのち、北陽浪花踊関係者からの書信を翻刻・紹介する。

## キーワード

大阪北の新地、半井桃水、岡鬼太郎、田中良、遠山静雄、木村富子

## はじめに

本稿は、大阪北の新地で芸妓扱い店・永楽席を営み、北陽演舞場の技芸責任者でもあった佐藤駒次郎(一八八一—一九五〇)が受信した書状、葉書を紹介するものである。書信の大多数は、田中良や木村富子など、北陽浪花踊の作歌・舞台装置などの担当者から駒次郎にあられたものである。このほか、小山内薫や食満南北など、北陽浪花踊(以下「浪花踊」という)に直接の関りはないが、戦前期大阪花街の経営者と舞台人たちとの交流をうかがわせる書信が含まれる。これらは、浪花踊や北の新地温習会の舞台がどのように考案され、編成されたかを知るうえでも格好の史料である。

書信類は全て現在、駒次郎の孫にあたる佐藤恵氏の所蔵品で、かつて筆者は所蔵者の委嘱を受けて調査し、知り得た書信の一部を翻刻・紹介した。その後、佐藤家史料の悉皆調査を行ったところ、絵葉書や写真などとともに別置されていた多数の書信を検出したので、併せてここに報告する。

書信は大正一二年(一九二三)以降敗戦までの四五点と、戦後の一三点からなる。本稿では戦前期の浪花踊関係者からの書信を翻刻

し、紹介する。

書信には、田中の自筆画（衣裳下絵・舞台下絵を含む）をはじめ、本文内容を補う図などを添えるものがある。これらは「図版」として通し番号を付し、その写真を掲げた。また「参考図版」は、書信に添えられたものではないが、本文を読むうえで有益と考えられる図版であり、全て佐藤家史料に含まれるものである。但し紙数の都合上、すべて後編の末尾に掲げることとした。

### 史料所蔵者について

史料を所蔵する佐藤家は、明治中期から北の新地で代々芸能に携ってきた。本稿で紹介する史料を残した駒次郎は、芸妓扱い店「永楽席」の経営者であり、父・卯之助は寄席「永楽館」の席主であった。以下、簡単な紹介を記す。

**佐藤卯之助** 嘉永六年（一八五三）生れ。寄席「永楽館」席主であった。「永楽館」は、「裏町席」<sup>1)</sup>と呼ばれていた寄席が明治三〇年（一八九七）四月ごろ、「遊芸館」と改称<sup>2)</sup>され、明治三三年、建物も新築されて「永楽館」と再び改称されたものであった<sup>3)</sup>。新聞記事によれば、「永楽館」開業に際し、在京落語家を「永楽館」へ周旋した<sup>4)</sup>。「永楽館」は九年後、北の大火で焼失するが、翌年には新築開業している。笹部新太郎の著作<sup>5)</sup>には「永楽館」の建物の風雅さや趣向の面白さの記述<sup>6)</sup>があり、卯之助はかなりの趣味人であったようだ。「永楽館」の前身、「裏町席」「遊芸館」と卯之助の関係は現在のところ詳らかでない。「永楽館」は大正四年、三友派に加入<sup>7)</sup>し、新聞には席主（佐藤）による「寿々女会」の命名などの記事<sup>8)</sup>が見られたが、大正七年、吉本興業直営<sup>9)</sup>となった。翌大正八年四月、「花月倶楽部」<sup>10)</sup>と改称された。卯之助は大正一二年、七一歳で没している。

**佐藤駒次郎** 明治一四年生れ。父は、佐藤卯之助。駒次郎は大正二年、「磯島席」の芸妓を吸収し「永楽席」を開業<sup>11)</sup>する。大正四年、

北陽演舞場が竣工し、北陽浪花踊も再興した。いつごろからか、駒次郎は演舞場の仕事に携わったようだ。技芸部長として、小林剛三や大西熊吉を補佐していた<sup>12)</sup>。大正一二年ごろには、市村座や田中良、大正一四年には花柳舞踊研究会など東京方面の舞踊界、演劇界との繋がりが深まっている<sup>13)</sup>。昭和八年（一九三三）頃には南木芳太郎との関係もでき<sup>14)</sup>、雑誌『上方』の企画にも協力した<sup>15)</sup>。昭和九年頃からは、南木も浪花踊へ協力<sup>16)</sup>し、昭和一〇年には、駒次郎が北の新地に關する一文を『上方』に寄稿し<sup>17)</sup>、南木主催の上方舞大会が北陽演舞場で開催された<sup>18)</sup>。

昭和一二年以降、日中全面戦争の影響で浪花踊も中止され、上方舞大会も三回で中断する<sup>19)</sup>。駒次郎は、北陽演舞場が焼失した昭和二〇年六月の大阪大空襲以前、佐藤家史料とともに芦屋へ疎開し、昭和二五年、そこで没した。

**佐藤はな**（駒次郎の妻）、**笑子**（娘）、**恵**（孫） 佐藤家史料はその後、駒次郎三回忌の頃には遺族が北の新地に携行し、駒次郎の妻・はな、娘・笑子、そして現在の所蔵者である恵氏へと継承される。はなと笑子は、北の新地で待合などを経営しながら、舞踊の道へ入った恵氏<sup>20)</sup>を支えた。はなは昭和五九年に、笑子は平成一三年（二〇一一）に没した。

### 書簡の概要

北陽浪花踊の担当者からの書信として、半井桃水、岡鬼太郎、田中良、遠山静雄、木村富子からのものが残る。ほかに、小山内薫、食満南北、長谷川小信、須藤五郎からの書信がある。以下、差出人毎に書信の概要を記す（史料全体の概要は文末に表1で示した）。

**半井桃水**<sup>21)</sup> 大正六年から同一五年まで、浪花踊の作歌者を勤める。

所蔵される書信は、大正一三年一二月のもの一通で、大正一二・一三年、岡村柿紅と一緒に担当したのち、岡村の病状が悪化し再度半井が担当

する時期のものである。岡村は一四年五月に没し、半井も一五年一月没している。手紙の内容は来たる大正一四年の勅題を詠んだ歌詞であるが、浪花踊とは関係ないようである。

**岡鬼太郎**<sup>22)</sup> 半井桃水のあと、昭和二年から昭和五年まで浪花踊の作歌者。消印が読めない書信が二通あるが、一通は大正一五年以降、もう一通は昭和三年から昭和五年頃までのものと推定できる。消印が判読できるものもこの時期に入り、六通全てが、岡が作歌を打診されたころから作歌担当時期の書信である。内容は、作歌依頼に関わるかと思われる観劇や、浪花踊打ち合わせのための駒次郎の上京、執筆に関わるかと思われる書籍の貸与、到来物の礼状である。

**田中良**<sup>23)</sup> 北陽演舞場での初仕事は、大正一二年、第九回浪花踊で第五場「春日の歌垣」の舞台考案であった。佐藤家史料には、大正一三年「俄仙人」の舞台下絵(会名は記載されない)と、翌一四年の温習会での「隅田の四季」の衣裳下絵が各一枚残っている。さらに大正一五年の第一二回浪花踊以降、昭和一二年の第二三回まで、毎回の舞台美術を担当した。昭和三年以降は、温習会や踏華会でも数多くの舞台美術や衣裳を担当し、北の新地とは大変密な関係であったらしい。全二〇通の内容は、浪花踊の打合せが多く、在京の田中が遠山や二代目花柳寿輔と話し合い、共に三越衣裳部へ選定に出かけるなど、舞台や衣裳、道具を作っていく様子が書かれている。また田中は書信で、舞台下絵を描くための資料の提供を駒次郎に依頼している。書信には彩色された絵も描かれており、下絵が現存しない作品の衣裳絵等も含まれる。さらに昭和一二年の書信(二通)からは、日中全面戦争の影響下での春の踊上演可否をめぐる四花街の議論を窺うことができる。

**遠山静雄**<sup>24)</sup> 大正一五年、第一二回浪花踊から、昭和六年、九年を除き、舞台照明で参加している。彼の書信は一通しか残されていないが、田中良との連携がわかり、また、照明に関する具体的な依頼内容が記されている。

**木村富子**<sup>25)</sup> 第二一回浪花踊(昭和一〇年)から、戦前期最後の浪花踊であった第三三回まで、作歌を担当している。書信は六通残っており、最初は昭和八年のもので、浪花踊に参加する以前のものである。消印(一二月)と内容から、例年一月、開催される温習会用作品の作歌に対する謝礼への礼状と思われる。富子の書信には、彼女の作歌姿勢を伝える箇所がある。二世寿輔の振付を尊重し、都合で歌詞を省略、また増補してよい旨を具体的に例示している。また駒次郎へ、依頼内容への助言を求めたものもある。

#### 【注】

- 1) 明治初期から中期に北の新地に存在した落語席。樋口保美氏によれば、裏町席は、明治一二年『大阪朝日新聞』(四月二〇日付)の記事(「北新地裏町の定席」)が初見であり、『桂文我出席控』(明治二二年三月)にも「北新地うら町席」とみえる(樋口保美編「大阪の寄席」、大阪芸能懇話会発行『芸能懇話』一六号、七七頁)。
- 2) 明治三〇年一月一日付『大阪朝日新聞』に、桂派の席として「北新地裏町席」が見え、同年四月二日付『大阪毎日新聞』にも「来月一日より(略)北新地裏町等の四席へ出勤」とあり、同年四月二六日付『大阪毎日新聞』には「不図した縁で北の新地遊芸館に掛つた」とあることから、改称は明治三〇年四月頃と推定できる。新聞記事は、丸屋竹山人「上方落語史料集成」(<http://blog.livedoor.jp/bunzaiemon/>)に拠った。以下同じ。
- 3) 明治三三年一〇月二七日付『大阪朝日新聞』「改装中の遊芸館は、此頃落成したるを以て永楽館と改称」による。
- 4) 明治三三年九月二日付『大阪毎日新聞』「今度北新地永楽館へ佐藤の周旋にて東京の落語家柳家燕路と五開楼雲輔の兩人来阪し」、また同年一〇月二三日付『同』「来月一日より開場する由なるが、出演者は(略)

- 東京より三遊亭市馬、柳家小柳三が出勤」による。
- 5) 笹部新太郎「北の新地と永楽館」『大阪弁』第三輯(清文堂、一九四九)、一〇六―一〇五頁。
- 6) 風雅さについて笹部は以下の様に述べる。「明治四十二年北区の大火で焼けた永楽館こそは、たしかに全日本を通じて、寄席建築ではその比類を見ない風雅なものであった。(略)この趣味人によつて再建された永楽館は、さすがにやはり日本一の風格を襲つてはゐなかつた。(注5)前掲書、一一〇頁」また、趣向については以下の通りである。「炎暑の頃には屋根からシヤワーが夕立を想はせる音を立て、落ちる仕組みにきてゐて」(同書、同頁)。
- 7) 大正四年七月一日付『大阪毎日新聞』「浪花三友派 各席へ一日より北陽の永楽館が新に加入せり」による。
- 8) 大正四年七月二日付『大阪時事新報』「寿々女会といふ名は一時佐藤が与へることに成り」による。
- 9) 大正七年一月一日付『大阪朝日新聞』「永楽館開館 北の新地永楽館は吉本興業部直営の下に(略)女義太夫修養場の定席として開業」による。
- 10) 大正八年四月一日付『大阪毎日新聞』「永楽館改称 北新地永楽館は愈々内部の修繕落成せしを機とし名称を花月倶楽部と改め」による。
- 11) 佐藤家史料「帳簿(在籍芸妓 開・廃業控帳)」による。
- 12) 「小林翁を扶けて佐藤駒治郎氏がゐた、佐藤氏は在来せずと北陽の技芸部長として(略)佐藤氏に一切を任して悠然たる取締大西熊吉氏」による(中井浩水「回頭 春の踊」南木芳太郎編『上方』第四号、一九三一、七六頁)。
- 13) 「関東大震災の頃市村座の舞台事務を預つてゐた為め同年秋宝塚に於て菊五郎一座の公演をすることになり、関西へ出張した頃から岡村柿紅氏を通じて北新地の役員諸氏と知り合ひになり、此の縁によつて岡村氏作詞のもの、舞台を描くことになつた(略)花柳舞踊研究会の創作発表も可成り其意義と価値とを認められて、可否を論じられる声も大
- 21) 半井桃水・万延元年(一八六〇)生れ。小説家であり劇評家であった。共立学舎に学んだあと、東京朝日新聞社で、記者・小説家として活躍
- 14) 田中良『舞台美術』(西川書店、一九四四)、一〇二頁。  
『上方』二五号(一九三三)に、新年の名刺広告が見られるのが、南木との付き合ひに關する初見。
- 15) 南木と面識が出来る、南木・佐藤ともに花街文化の記録を希望し、佐藤くのに聞き取り調査を実施している(佐藤くんに「曾根崎夜話(一)」『上方』二八号、一九三三、七二―七三頁)。
- 16) 『南木日記』昭和九年四月二四日条に「朝、佐藤駒次郎氏より北陽の番付の件電話」とある(大阪市史編纂所『南木芳太郎日記 二』大阪郷土研究の先覚者)大阪史料調査会、二〇二一、五七頁)。
- 17) 佐藤駒次郎「北新地の変遷」(『上方』五〇号、一九三五)、七八―八〇頁。「上方舞大会」は南木芳太郎が中心となつて企画した。昭和一〇年から同一二年まで年一回、三月に開催された。第一回記事は『上方』五〇、五一、五二、五三(一九三五)、第二回記事は『同』六三、六五(一九三六)、第三回記事は『同』七五、七六(一九三七)に掲載された。中断ののちも、昭和一四年から三回ほど、傳法家で「上方会」と称して内輪の会を開催していた。拙稿「戦前期大阪花街における地歌舞伝承と芸妓の動向―南地大和屋の史料と北陽 佐藤くんにの言説を中心に―」(『人間社会環境研究』四〇号、二〇二〇)参照。
- 18) 佐藤恵氏(昭和二七年(一九五二)生れ)は、昭和三二年、花柳祿寿に入門した。昭和三三年、復活した浪花をどり「土蜘蛛」の石神役を勤めた。昭和四五年、花柳流普通部名取試験に合格し、花柳祿美之の名を許される。昭和四六年、第九回なにわ芸術祭新進舞踊競演会、新人賞受賞(長唄「大原女」。昭和五〇年、大阪文化祭賞奨励賞受賞(長唄「京鹿子娘道成寺」。平成九年(一九九七)頃、一身上の理由で舞踊家を引退した。

した。樋口一葉は桃水の門下であった。また、邦楽の作歌も手掛けた。大正一五年(一九二六)、没した。早稲田大学演劇博物館編『演劇百科大事典』(平凡社、一九六二)二二六二頁、参照。

22) 岡鬼太郎・明治五年(一八七二)生れ。本名嘉太郎。脚本作家(代表作『今様薩摩歌』)で劇評家(『歌舞伎眼鏡』『歌舞伎と文楽』)。明治座、松竹で興行に携る。昭和一八年(一九四三)、病没した。国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第二卷(吉川弘文館、一九八〇)七二六頁、竹下英一『岡鬼太郎伝』(青蛙房、一九六九)、参照。

23) 田中良・明治一七年(一八八四)生れ。舞台美術家。明治四三年、東京美術学校卒業。同四五年から帝国劇場で背景部助手となる。大正八年(一九一九)一〇月、歌舞伎座の舞台装置(隅田川)を担当した。大正一三年から宝塚歌劇団で背景部を指導する。昭和一一年(一九三六)、東京宝塚劇場舞台課長に就任した。明治末から昭和初期にかけて、舞台美術、装置、衣裳などで活躍し、花柳舞踊研究会など新舞踊の分野では意欲的な作品を提供した。東京文化財研究所「東文研アーカイブデータベース」、田中良『舞台美術』(西川書店、一九四四)、『演劇百科大事典』五二七〜五二八頁、参照。

24) 遠山静雄・明治二八年(一八九五)生れ。舞台美術家・照明家。大正四年(一九一五)、東京高等工業学校卒業。同九年、研究会第一回公演(於有楽座)に参加して以来、藤蔭会、市村座、花柳舞踊研究会などで照明や美術に携る。昭和四年(一九二九)、遠山照明研究所を創設している。舞台照明の黎明期から、照明の現場や経営、教育など様々な方面で活躍した。昭和六一年没する。社団法人日本俳優協会編『歌舞伎の舞台技術と技術者たち』(八木書店、二〇〇〇)四七頁、遠山静雄『舞台照明五十年』(相模書房、一九六六)、『演劇百科大事典』一五七頁、参照。

25) 木村富子・明治三三年(一八九〇)生れ。昭和初期の歌舞伎の脚本家であり、舞踊の作歌者であった。戯曲を松居松翁に師事した。大正

一五年(一九二六)、歌舞伎座で上演された「玉菊」が劇作家としての最初の仕事であり、代表作は「黒塚」や「独楽」など、二世市川猿之助のために書いたものであった。木村錦花は彼女の夫である。昭和一九年(一九四四)没した。『演劇百科大事典』二二八頁参照。

### 佐藤家史料 佐藤駒次郎宛書信

#### 凡 例

一、書信は浪花踊を担当した発信人とそれ以外の発信人に分け、発信人別、年代順に配列した。発信人の順番は、現存する書信の年代順とした。消印の判読が困難な場合は住所・内容などから推測し、明らかになった範囲で順番をつけた。期間に幅がある場合は、その最も遅い時期に置いた。

一、発信人名の下に「\*」印を付した書信は、かつて筆者らが一部を紹介したものである(「大阪花街・北新地と舞台美術家」田中良―佐藤家史料をもとに―『人間社会環境研究』第三二六号、二〇一八。以下、前稿という)。

一、発信人名の下に括弧つきで消印を記し、判読できないときは「消印読めず」と記した。

一、書信は、宛先住所・宛名・内容・日付・発信人住所・発信者名など、記された全てを翻刻した。宛先住所氏名、発信人住所氏名は、それぞれを一括りに記載した。

一、官製葉書などで表裏のある場合、(表)(裏)で示した。絵葉書など宛先等と内容とが上下段に記される場合はこれを分ち、それぞれの末尾に(上段)(下段)と記した。

一、本文は現行の漢字に改めたが、異体字などは残した場合もある。

一、抹消された文字には右傍にクを付した。判読できない文字は  
 〇で示した。

一、改行は斜線で示した。

一、発信人が記述した月日を書き添えている場合、これを記した  
 のち空白をとり、発信人の住所氏名を記した。

一、自筆の絵が本文中に添えられている場合や、内容と関係のあ  
 る写真絵葉書が使われている場合は、「図版」として番号を付  
 し、(下)の末尾に纏めた。図版に付された注記は、本文中に  
 は記載していない。また、内容と関係の深い絵や写真を、「関  
 係図版」として付した場合がある。

一、本文の後に、備考を○印を付して記した。内容は次項以下の  
 通りである。

一、消印の判読できない部分や発信人が特定できない場合、その  
 考証結果を記した。

一、今回の悉皆調査で新たに発見された史料により明らかになっ  
 たこと、または前稿を訂正すべきことなどを付記した。

一、その他、適宜類推されたい。

### 書信翻刻

#### 浪花踊の作歌者、舞台担当者からの書信

一、田中良ハガキ(消印読めず)

(表)

大阪市北区曾根崎新地ノ一丁目二十二ノ佐藤駒次郎様

大正十二年九月二十七日 東京中渋谷七〇四 田中 良

(裏)

御見舞を只今有難拝掌任りましたノ毎々の御厚情を深謝致します

小生市村座のノ事務所で大地震に出合ひましたが幸ひ助かり 渋谷  
 のノ宅も先づ無事で御座いました

此度の事は何に例へ様も御座いませぬノ誠に悲惨の極で御座いまし  
 た美しきノ芸者諸君も会ふ人皆此様な姿で御ノ座います。  
 実に気の毒です。(図版一)

○関東大震災の惨状を伝えるハガキ。田中良はこの年五月の第九回浪  
 花踊「歌絵巻」に、初めて「舞台考案」で参画した。なお田中は、  
 著作『舞台美術』(一九四四)で、まず市村座との関係で岡村柿紅  
 から北の新天地関係者を紹介され、その後花柳舞踊研究会との関係も  
 出来たと述べている(前掲書、一〇二頁)。

二、田中良ハガキ\*(消印:□□27.12)

(表)

大阪市北区曾根崎ノ新地二ノ四四ノ永楽席ノ佐藤駒次郎様

七月十二日 宝塚にてノ田中 良(上段)

謹呈ノ先夜は態々御ノ出向き下さいましてノ有難ふ存じましたノ又  
 其節は非常にノ気のきいた籠を頂ノきましたので東京へ持ノち帰り  
 大に好評で御ノ座いました厚く御礼をノ申し上升。小生ノ昨日こ  
 へ参りましたノたが矢張り今夜ノ汽車で帰ります。ノ又いづれ御め  
 にか、り升。(下段)

(裏) 宝塚ホテル写真(略)

三、田中良ハガキ\*(消印:渋谷2.10.4)

(表)

大阪市北区曾根崎新ノ地一ノ二二ノ永楽席ノ佐藤駒次郎様

十月四日 東京ノ中渋谷七〇四ノ田中 良(上段)

謹呈ノ先日は失礼致しましたノ又昨夜は態々御使にノて特別美事な  
 松ノ茸を御恵与下さノれ誠に有難ふ存じノました。今日は幸舞ノ



台美術協会の寄り／会ひが宅で御座い／まず故 早速茸の御／飯をたいて御馳走に／なる積りて楽しんで居／ります。／不取敢御礼迄。

(下段)

(裏) (図版二)

四、田中良ハガキ (消印：□□33.12)

(表)

大阪市北区／曾根寄新地一ノ二二／永楽席／佐藤駒次郎様

東京渋谷町／栄通二ノ一五／田中 良

(裏)

前畧／例の灘波橋及北浜辺のビルデングの参考／写真が御手に入りましたら至急御送り／願へますまいか但小生の大阪行は／四月始めになりますから或は此の場だけ／の下絵が其れからに願へれば尚結構／さすればスケッチを致します／右御願迄 三月<sup>12</sup>日

○「難波橋及北浜辺のビルデング」は、昭和三年五月の浪花踊(第一四回)第六場「大大阪」の舞台下絵に使われた。『浪花踊』番付(一九二八)掲載の写真を(下)の末尾に掲げる(参考図版1)。

五、田中良ハガキ (消印読めず)

(表)

大阪市北区曾根寄／新地一ノ二二／永楽席／佐藤駒次郎様

東京渋谷／田中 良

(裏)

謹啓 先日は失礼／八日に宝塚の打合せが有りますので七日夜出発致します／只今の予定では十一日の夜出発帰京の予定で御座／いますから其の間に夜分一度御目にかゝつて道具其／他の件御打合せ致しますと思ひます。先刻花柳氏遠／山氏と会ひまして大体の相談をまとめました新橋舞／場の阪崎出羽守の道具を装置致し昨日初

日今日も参／り中々忙しいので下絵が未だ出来ず案はまともまりましがたが出発迄に間に合へばよいかと考へて居ります。／孰れ夜分にも電話で御相談の上御目にかゝりませう。／梅次郎氏帰阪以来花柳氏の所にも当方にも何んの音沙汰が有／りませんが丈夫であるのでせうね。勞れでもしたのではないかと今日／も話して居る所で御座います。三月四日夜

○消印からは年代未詳。但し「新橋演舞場の阪崎出羽守」は、昭和四年三月、同演舞場において田中の舞台装置で上演(菊五郎一座)されているので(田中『舞台美術』)、この年次のハガキと推定できる。

六、田中良ハガキ\* (消印：渋谷4.15)

(表)

大阪市北区曾根寄／新地一ノ二二／永楽席／佐藤駒次郎様

四月十四日夜 東京渋谷町／栄通二ノ一五／田中 良(上段)

謹啓 先日中は有難／ふ存じました 予定の如く／十一日朝帰京今夜／東踊見物。都踊と／東踊の対象<sup>マ</sup>があまりにも極端なので、<sup>流石</sup>は／とうなづかれました斯／くして夫々独特の立場に／到着するの有りませう。／今度は愈々北の踊りを／拝見する番です 大に、成／功を祈り升。／週間朝<sup>マ</sup>日座談会の記事／拝見しました／皆様へよろしく(下段)

(裏) (図版三)

七、田中良ハガキ\* (消印：渋谷4.5.30)

(表)

大阪市北区曾根／寄新地一ノ二二／永楽席／佐藤駒次郎様

東京渋谷町／栄通二ノ一五／田中 良(上段)

謹啓／浪花踊も目出度千秋楽／大慶に存じます。御勞れの／事と御察し致します。昨日／檜屋町で梅二郎氏と会ひ稽／古を見ました。

お菊さんも非／常に熱心に練習をしたり教／へたりで元氣な御容子  
 です／皆さんの大成を心から祈り升。／劇画展が松坂やで開かれ  
 ／今日閉会致しました切出し／沢山の奴道成寺（明治座／五月狂  
 言）の舞台面御／覽に入れ升。（下段）

（裏）**（図版四）**

○「奴道成寺」は昭和四年五月、菊五郎一座が明治座で公演した舞踊で、  
 田中は舞台装置を担当した（『舞台美術』）。ハガキに描かれた油絵  
 には田中の署名（1929-Ryo）がある。文中に見える「梅二郎」は北  
 の新地伊東席の芸妓で、踊りに長じていた。

八、田中良ハガキ（消印読めず）

（表）

大阪市北区曾根寄／新地一丁目／永楽／佐藤駒次郎様  
 四月十四日 東京渋谷町栄通二ノ一五／田中 良

（裏）

謹啓 先日は失礼致しました。小生昨日帰京 午后大和田から／聞  
 合せに参りましたのでセーラー。乙姫。踊子。の衣裳を大体／定め  
 て置きました。乙姫のスカートは幻浦寫の時の有物を／用るとし  
 て上着はあまり月並な有物では感じが新／らしくないので 薄物で  
 一着作る事に致しましたから／御報告致して／置きます。／頭も今  
 度は／軽い気持の／冠に致し升。／成可地頭を／生かし冠が／すけ  
 て中の／髪形の／見える様に／したい／と思ひ升。／髻では／冠  
 が大きく／なり過ぎる／恐れが有り／ます。

二仲、東京劇場五月狂言の／舞台の件にて 遠山氏も／小生も三十  
 日の稽古日に／はどうしても立ち合へませんから 二十九日午後龍  
 宮以下の道具調べをしては如何です？（**図版五**）

○消印からは年代未詳だが、文中の「セーラー・乙姫・踊子」から、  
 昭和五年浪花踊（第一六回）の衣裳と推定できる。第五場「龍の宮居」

に乙姫と踊子、第六場「戦捷記念」に水兵が登場するため。

九、田中良書簡（封筒なし）

謹啓／毎日準備に御忙し／い事と存じます。／今日花柳師匠／と三  
 越衣裳部／へ参り 五人女の／衣裳を選定致して参りました／衣裳  
 部の大久保／岡田諸氏の非常／な努力で 沢山の／柄を次から次ぎ  
 と見／せてもらひ 幾度か／配列を変へ 吟味／を重ねて遂に素／晴  
 らしい感覚的／にして情調に富む／だ配色を得ました／最初はお  
 七、お夏、お／仙と皆普通有りき／たりのお定まりに衣裳／を定め  
 ましたが 段々／練る内に 上図の如／き組合せに到着／実に満足な  
 五重奏／が組上つた次第です／お悦び下さい／一寸御報告迄

四月十六日 田中 良

今度の好みは／西鶴其ま、と云ふ立場から論ずるならば／多少の異  
 議が有るかも知れませんが 現代に／生きるもの、感覚を含まして  
 の 而も五重奏と／して 大に自信有る好みだと 考へてゐます（**図  
 版六**）

○「西鶴五人女」は昭和六年浪花踊（第一七回）の第五場にあり、こ  
 の年の書状と推定できる。

一〇、田中良ハガキ（消印：大阪中央61015）  
 （表）

大阪市北区曾根寄／新地一丁目三二／永楽席／佐藤駒次郎様  
 十月十四日夕 宝塚にて／田中 良

（裏）

昨夜は失礼致しました。「紅燈の夕」第二場の道具は／如何様な構  
 図でも好いと存じますが 御参考迄でに畧／図御覽に入れます。勿  
 論一枚物で結構でせう。／之れから帰京致します。（**図版七**）

○「紅燈の夕」は、北陽秋季温習会の演目と推定できる。昭和六年の

温習会は、十一月六日～十五日〔近代歌舞伎年表〕大阪篇。なおこの演目は、昭和五年十一月二十四日の花柳舞踊研究会(第二二回)において、花柳芳次郎振付で上演されたものである(佐藤家所蔵版番組による)。

一一、田中良ハガキ(消印:渋谷7429)

(表)

大阪市北区新地/北陽演舞場/事務所/佐藤駒次郎様

東京渋谷町栄通二ノ一五/田中 良

(裏)

謹呈 御端書有難く拝掌/準備万端完整愈々今日は舞台稽古の日となりました/御成行を祈つて居り升。/来る五月一日の初日も近づきました/本年も例年通り好成绩で有る事/をいのり「まねき猫」君の活躍で/千客万来の事と存じます。/皆様へよろしく御鳳声願上升。/四月二十九日/天長節朝(図版八)

○昭和七年浪花踊(第一八回)の第四場「御朱印船」に、ペルシヤ猫の役がある。

一二、田中良ハガキ(消印:渋谷894)

(表)

大阪市北区/曾根寄新地一丁目二二/永楽席/佐藤駒次郎様

東京渋谷/田中 良

(裏)

謹啓/先夜は失礼致しました/小生予定通昨日帰京 夜東劇を見物致しました/「流星」も流星に達者です。大阪では背景を工風して多少の/新味を添へた方が好くはないかと考へて居ります。/オランダの衣裳も大体見当が付きましたから近日中に下絵を御送します。(図版九)

○図版は昭和八年の北陽秋季温習会「思凡」の衣裳下絵(尼僧の衣裳)。東劇の「流星」は未詳。

一三、田中良ハガキ\*(消印:渋谷898)

(表)

大阪市北区曾根寄/新地一ノ二二/佐藤駒次郎様

東京渋谷区/栄通二ノ一五/田中 良(上段)

前畧/御書面拝掌/「阿蘭陀万歳」の衣裳下絵は/家元さんの方へ御/送り下さいませ。/一昨六日夜家元さん/光来種々打合せを/致しました流星の件/考へて見ます。/九月八日朝(下段)

(裏) (図版一〇) 右端に「東劇九月狂言「高坏」高下駄売」

○「阿蘭陀萬歳」は、昭和八年十一月の北陽秋季温習会で上演された舞踊。佐藤家に残る衣裳下絵を、参考図版2・3として後掲。

一四、田中良ハガキ(消印:渋谷□920)

(表)

大阪市北区曾根寄新地/一ノ二二/佐藤駒次郎様

九月二十日 東京渋谷区榮通/二ノ一五/田中 良

(裏)

段々/御準/備が進むで/居ることと存じ/ます。/思凡。春信。/阿蘭陀。/流星。の/道具帳が/出来ましたので/花柳氏に一度御覧に入れてか/ら御送り致します。実は一昨々日完成/したので/すが家元さんが御地へ/出発される日/を知らなかつたので/一寸手順が違ひ/ましたことを惜しく思ひました。皆さんへよろしく。小生は二十六日/夜出発 宝塚へ/参ります故/詳細は拜眉の/上のごとに/致し升。(図版一一)

○「思凡・春信・阿蘭陀・流星」は昭和八年の、北陽秋季温習会の演目である。上演期間は十一月六日～十五日〔近代歌舞伎年表〕大

阪篇。

一五、田中良ハガキ\* (消印：大阪□□8124)

(表)

大阪市北区曾根寄／新地一ノ二二／永楽席／佐藤駒次郎様

十二月／四日朝

大阪駅にて／田中 良 (上段)

前畧／過日花柳舞踊研／究会の際には 態々／電報を頂きまして／有難ふ存じました／お蔭様で盛会賑／かに公演を完了致／しました。昨夜が藤／蔭会で御座いました／ので中途迄見て 只／今大阪へ参りました／七日の夜帰京致し／ます。／皆様へよろしく(下段)

(裏)

(図版一二)「第廿八回 藤蔭会(十二月三日比谷公会堂)／静枝

氏振付け「雁金」 島衛月白浪 望月の妾宅と／お照」

○花柳舞踊研究会(第一七回)は十一月に開催された。藤蔭会(第

二八回)とともに、田中の舞台装置である(『舞台美術』)。

一六、田中 良書簡\*(封筒なし)

佐藤駒次郎様

二月二日

前畧／先夜は態々電話を頂き幸在宅 親しく御打合／せが出来ましたので甚だ幸で御座いました。早速花柳家／元と御相談の上 衣装図案致しましたので不取敢御／送り申し上 勿論そちらの御考慮御工風も御／入れ頂き 尚ほ染色者側の技術上のことも御追加願ひ升。／髪の形も大体此図の様な宝曆風を加味したものにし／て 顔に似合ふ様 御工風を願ひたいと存じます。／背景は此様な屏風がよろしいかと思ひ升 長唄台ケコミ赤 (図版一三)

○図版一三は、素踊「汐汲」の舞台下絵である。北陽演舞場では、この演目を昭和九年三月の鶯遊会と、同十五年四月の踏華会との二回、

田中の舞台装置で上演している。後者については、演舞場の用紙に清書された別の下絵が残り、本図版とよく似た構図だが、田中はこれを会心の作と『舞台美術』に記している。前稿では二枚の下絵の関係を未詳としたが、本稿を纏める過程で、図版一三は昭和九年の下絵であると考えに至った。手紙の文面に「背景は此様な屏風がよろしいかと思ひ升」と見え、この図版は「屏風」の下絵であったと読み取れる。一方、同十五年の背景については「相等古るびの付いた箔置き屏風を描きたる張物を置き」と『舞台美術』に記されているから、下絵は屏風ではなく「屏風を描きたる張物」の絵であったと思われる。すなわちこの書状は、背景に張物を用いた昭和一五年「踏華会」関係のものとは考え難いのである。

一七、田中良ハガキ (消印：渋谷9,413)

(表)

大阪市北区／曾根寄新地一ノ二二／佐藤駒次郎様

東京／渋谷区栄通／田中 良

(裏)

謹啓 先日は御多用御忙しき中を態々御来宝給はり／恐縮に存じました。二十周年の結構なる記念品 誠に有難／存じました。早速机の上に置いて楽しみに使用致して／居り升。／演舞場各位へ宜敷御風声／願ひ上げ升。

「千代の盃」夢の泡雪の舞台下絵の写真 御送付下されま／し御使 只今正に拝掌仕りました。昨日帰京 三之輔氏と／電話で打合せ 今日大和田に徐福の衣裳下絵を渡しました。(図版一四)

○「千代の盃」は昭和九年浪花踊(第二〇回)の題目。「夢の泡雪」は第五場、「徐福」は第四場「不老長生」に登場する役で、佐藤家に衣裳下絵が残る(参考図版4)。

一八、田中良ハガキ(消印:渋谷9428)

(表)

大阪市北区曾根寄新地/一ノ廿二/佐藤駒次郎様

東京渋谷区栄通/二ノ一五 田中 良

(裏)

其後は御無沙汰を致して居ります。／愈々開場も近付き／定めて御多忙のこと、／御察し致し升／今日／は舞／台稽古て是非／參上致したいと思／つてゐましたがどうしても／時間の都合が出来ず失礼／致し大に御成功を祈つて／居ります。番付けも今朝拝掌致しました。／皆さまへよろしく。／昭和九年四月二十八日

新編越後獅子／が東劇六月興行に／上演されることになりました。

昨日顔見世振見せを致し／一日が初舞台稽古と云ふこと／になりました。(図版一五)

○「新編越後獅子」は水谷八重子による東劇五月公演。田中が舞台装置を担当した(『舞台美術』)。

一九、田中良ハガキ(消印:目黒13130)

(表)

大阪市北区曾根寄新地/一ノ二二/佐藤駒次郎様

一月三十日 東京市渋谷区/栄通二ノ一五/田中 良

(裏)

謹啓、過日は浪花踊の件に付き電報を頂きましたが／其後の御模様は如何かと考へながら道具帳の方を進め／て居ります。実は東京の新聞に関西の春の踊は全部遠慮／に決定したとの通信が大きく出ましたので 家元とも話を致して居／りましたが 電報を頂いたので 昨夜も家元光来の際 御詳報を御待／ち致して居るむね話合ひました。兎も角時局は次第に複雑になつて／参りましたので 愈々益々大事を取らなければならぬこと、覚悟致／して居りますので 公私

共に充分気を引締めて 非常時に對しなげ／ればなりません。其の上 目下悪性の流感に見舞はれ 拙宅でも次／ぎから／と寝込むだり入院したり致して居る者が四人も有りますので／時間的にも誠に心外の障害を蒙つて居ります。／戦地に於て厳しい寒さの中で戦を続けて居られる皇軍将士の事を思／へば 吾々として懸命に意思を強くして働かなければなりません。／「春の踊」の如きも大にやるなら非常時に対応したものでなければなりません。／右御伺ひ迄で

二〇、田中良ハガキ(消印:渋谷2131)

(表)

大阪市北区曾根寄新地/一ノ二二/佐藤駒次郎様

東京市渋谷区栄通二ノ一五/田中 良

(裏)

前畧／昨日端書を差出しました直ぐ後で／御書面を頂きました例年と違ひ其／内容表現とか演出等にも相等の注意／と用意とが必要だと思ひます。孰づれ／御目にかゝる時詳しい御相談は致しますが／道具衣裳等に付いても相等考へませう。／皆さんによりしく御鳳声願上升／一月三十一日

○ハガキ一九・二〇は、日中戦争の深刻化を受け、四花街「春の踊」を継続するか否かについての、花街の意向を知り得る貴重な史料である。昭和十三年一月、四花街の役員達は協議の上、「春の踊」の中止を決定したという(『大阪朝日新聞』一月二十三日付紙面)。しかし同日の『大阪毎日新聞』によれば、新町廓が率先して中止を決め、堀江・南地もこれに従ったが、北の新地は「別の形式」で準備をすすめるとある。拙稿「北陽浪花踊の新出史料と大阪四花街「春の踊」の変遷」(『人間社会環境研究』第三二号、二〇一六)を執筆した時点で、「別の形式」とは何かが理解できなかったが、この二通によつて次の事柄が判明した。すなわち、北の新地ではあくまでも浪

花踊の継続を考え、舞台を田中に依頼したこと、田中はその考えを一応支持し、「非常時に対応」した舞台となるよう、慎重な配慮が必要と述べたことである。また、このころ北の新地では、食満南北に作歌を委嘱したらしい(神戸女子大学古典芸能研究センター編『食満南北著『大阪芸談』和泉書院、二〇一六、による)。食満は昭和四年から南地声辺踊の作歌を担当し、同八年からは堀江この花踊の作歌も担当していた。彼は非常時に適う歌詞を作ることにも長じていたので、北の新地は彼の起用を思い立ったのではなからうか(拙稿「戦前期大阪花街における「北陽浪花踊」と「堀江この花踊」―踊りの詞章から、それぞれの特色を考える―」『人間社会環境研究』第三八号、二〇一九)。北陽の「別の形式」とは、非常時適応型の浪花踊であった可能性がある。しかしこの構想は他の三花街の意向もあつて、大阪では合意を得るに至らなかったであろう。

二一、半井桃水ハガキ(消印:牛込[3]1215)

(表)

京橋区加賀町/小松屋方/佐藤駒次郎様

牛込若宮町三十二/半井桃水

(裏)

山色達天  
 昇の初日に山々の霞は晴れて/あさみどり、常磐の色はそのま、  
 に/遠くつらなる天つ空、賤がこゝろも九/重の雲居に通ふ時代ぞ  
 楽しき

普選上奏等の意味を/ふくんで

○「普通選挙法」は大正十四年三月十九日に成立し、五月五日に公布された。半井は、大正六年(第三回)から同一五年(第二二回)まで、北陽浪花踊の作歌者をつとめている。

二二、岡鬼太郎ハガキ(消印:芝[2]612)

(表)

大阪市北区曾根崎新地一ノ廿二/永楽席/佐藤駒次郎様

(裏)

拜啓 毎度御心にかげられ 舞台の写真/沢山御郵送被下 難有頂戴  
 仕候 乍憚/役員諸賢にも可然御鳳声奉願候/不乙

六月十一日夕

東京府荏原郡調布村/田園都市百七十号

岡 嘉太郎

○岡が浪花踊の作歌に携わったのは、昭和二年(第一三回)から同五年(第一六回)までである。

二三、岡鬼太郎ハガキ(消印:□[2]831)

(表)

大阪市/北区曾根崎新地一ノ二二/永楽席/佐藤駒次郎様

(裏)

芳墨拝誦、御上京後御手紙被下候趣に候へ共不/着、為に御挨拶申上御用御差支へもやと恐縮/仕候 此度の御状にて初めて思召しの程拝承、本/日新橋演舞場総浚ひにて花柳氏に面会致す/所るに付早速御相談は可申も小生の書いたものにて/直ぐ御役に立つやうなものは無きやう存じ/られ申候、何れ花柳氏と会見の結果はあと方/直ちに委曲可申上、不取敢御状拝見の御/挨拶まで 匆々

八月卅一日

東京府荏原郡調布村/田園都市一七〇

岡 嘉太郎

二四、岡鬼太郎ハガキ(消印:□[3]323)

(表)

大阪市/北区曾根崎新地一ノ二二/永楽席/佐藤駒次郎様

二月廿三日

東京府荏原郡調布村/田園都市一七〇/

岡 嘉太郎

(裏)

拝呈 先頃拝顔の節は失礼仕候、偕来月六日／頃御地へ例によつて芝居見物の為め参り候ま、序を以て各所の春の踊も見物いたし度と存候 若し入場／券の御都合つき候はゞ其折御惠授にあづかり／度く候、宿は葉村家の予定に付 投宿の上ハ早／速御通知可申上、拝顔の機を得られ候はゞ何彼と／御話も伺ひ度候、次にかねて恩借の御書籍長らく／留置き申訳無御座候が 数日内ニ鉄道便にてなり／と精々注意の上御返納可申上、爰数日旅行致し居り／候て何も彼も御無沙汰だらけ 御詫び申上候 昨夜帰宅の時に／一寸御便り申上候

二五、岡 鬼太郎ハガキ (消印：□□4.12)

(表)

大阪市北区曾根崎新地／一の廿二／永楽席／佐藤駒次郎様

(裏)

拝呈 此度は御多用中種々御厄介に／相成り且つ名物御惠投なし被下 難有頂／戴仕候 昨日無事帰宅のま、不取敢御／礼まで 敬具  
五月十二日／東京府荏原郡東調布町／田園都市／岡 嘉太郎

二六、岡 鬼太郎ハガキ (消印読めず)

(表)

大阪市北区曾根崎新地／一丁目／永楽席／佐藤駒次郎様

(裏)

拝復 先日は遠路御尋ね被下候処 何の御／構も不致失礼仕候 其節御話しのご詞御／郵送被下 正二落掌仕候 昨今ハ各座初日前／にて一寸取込み居り候へ共 精々取急ぎ執／筆 御手許まで差出し可申候 先ハ右御受／取りの御報まで 不一

廿七日

東京府荏原郡／東調布町／岡 嘉太郎

○年代未詳だが、住所の東調布町は調布村を昭和三年に改称したものの

で、同七年には東京市に合併されて消滅した地名である。さらに岡の「浪花踊」作歌担当時期を参照すれば、昭和三／五年の書信と思われる。

二七、岡 鬼太郎ハガキ (消印読めず)

(表)

大阪市／北区曾根崎新地一ノ廿二／永楽席／佐藤駒次郎様

(裏)

拝呈 番組三冊態々御惠送被下 有／難く落掌仕候 何れ来月可成早く拝／見に参りたくと存じ居り申候／先は御礼まで／不乙  
四月廿八日 東京府荏原郡田園調布駅の西／岡 嘉太郎

○年代未詳だが、住所にある田園調布駅は大正一五年一月、「調布駅」を改称したものの。

二八、木村富子ハガキ (消印：浅草21230)

(表)

大阪市／北陽演舞場内／佐藤駒次郎様

(裏)

おしつまりまして何かと御忙しき御事とぞんじ／上げますが御寒さの御さはりもなく御すごしの／由何よりと御喜び申上げますさて本日／花柳芳次郎氏より御届けにあづかりました／一封たしかに落手致しました つまらぬ作品で／いろ／＼と御心配を頂きました却つてお気の毒様に／ぞんじます。何卒あなた様より皆様へもよろしく／御伝へいたゞき度 先は取りあへず御うけまで／かしこ

十二月三十日 「木村」富子

○木村富子は、昭和十年(第二一回)から同十二年(第二三回)までの作歌を担当した。彼女が使用するハガキは夫の錦花が作成したもので、柱に「東京市浅草区千束町二ノ四二三／電話浅草四四〇三番

／木村錦花」と印刷されている。富子は印刷の「錦花」の下に「内」と記したり、「錦花」の上に「富子」と署名したりしている。花柳芳次郎（一九〇三～一九七二）は四世で花柳流分家家元。寿輔や三之輔とともに浪花踊の振付を担当し、戦時中から西宮市夙川に住んだ。

二九、木村富子ハガキ（消印：浅草91217）

（表）  
大阪市北区／曾根崎新地一ノ二十二／佐藤駒次郎様

木村富子

（裏）  
先頃はまことに失礼申上候 又御多忙の／折柄わざ／踊の御本をお送りいたゞき／難有御礼申上候 前節お約束の舞踊台本／本日出来いたし、ともかくも花柳家元へまで／さし上げ置候 名題其他内容とも御相談の／上よしなに御変へ下されても差支これなく／先はとりあへず御返事まで／かしこ

十二月十六日 「木村錦花」内

三〇、木村富子ハガキ（消印：浅草91217）

（表）  
大阪市北区／曾根崎新地一丁目／佐藤駒次郎様

（裏）

先日は失礼いたしました 早速ながら／第二。と第八。をんごくの唄だけがわかり／かねますので 以上二つだけ御教示いたゞき／たうぞんじます 田中先生にもおたづね／いたしましたが一寸わかりませんのでお手数／ながらよろしく御願申上げます 他の方は／どうやら出来さうで御座います／先はとりあへず御伺ひまで かしこ

一月廿日 「木村錦花」内

「中央演劇一冊御笑ひ草までに／お送りいたしました」（木村錦花添書き）

三一、木村富子ハガキ（消印：浅草12128）

（表）

大阪市北区／曾根崎新地／壺丁め／佐藤駒次郎様

（裏）

前畧／一昨日お送り申上げました原稿のうち／正月。船入り見よとの「て」を一字／お消し下されたく／九月。最初の二三行御都合にて／除いてもよろしく／十二月。時間都合で間に「里の花」など／かき入れてもよろしくとぞんじます

廿七日 「木村錦花」内

三二、木村富子ハガキ（消印：浅草12210）

（表）

大阪市北区／曾根崎新地壺丁め／佐藤駒次郎様

（裏）

前畧／たゞ今 中央演劇創刊号より／とりそろへてお目にかけたし／御寸暇のをりに御笑覧下さいませば／おうれしうぞんじます／先はとりあへず右まで／かしこ

二月十日 「木村」富子

三三、木村富子ハガキ（消印：浅草12521）

（表）

大阪市北区／曾根崎新地一ノ二十二／佐藤駒次郎様

（裏）

先夜は失礼いたしました／その折にお話の御座いました／富士太



鼓不出来ながら只今／お送り申上げました／何誰が節付して下さ  
いませうか／お定まりになり次第 お知らせ下さいまし／先はとり  
あへず御返事まで／かしく

五月二十一日 「木村錦花」内

二四、遠山静雄ハガキ(消印：□橋12216)

(表)

大阪市北区曾根崎新地／一ノ廿七／佐藤駒次郎様

東京、大森、上池上1009／遠山静雄

(裏)

拝啓 過日ハ失礼仕候／本日御送付被下候浪花踊台本／正に拝受仕  
候 いづれ田中様と／打合せ 考案仕るべく候 尚紫外線／による発  
光塗料の件バグナルにて／一応御調査願度存候

二月十六日

敬具

○遠山が浪花踊に関わったのは、大正十五年(第一二回)が最初である。  
その後は昭和六年・九年を除き、同十二年まで照明等に携わった。

### 付記

本稿は笠井純一を研究代表者とする科学研究費助成事業「戦前期大阪花  
街の社会的機能に関する基礎的研究…芸能と社会との関係を中心に」(基盤  
研究(C)課題番号：18K00925、二〇一八～二〇二〇年度)による研究成果の  
一部です。なお二〇二〇年九月四日、オンラインによる研究会で本稿の概  
要を報告しましたが、当日参加された研究分担者…田村義也氏、塚原康子  
氏、藤田勝也氏、研究協力者…大西秀紀氏には貴重なご意見や情報をいた  
だきました。厚く御礼申し上げます。

また樋口保美氏には、「上方落語史料集成」の閲覧についてご高配いただ  
きました。あわせて厚く御礼申し上げます。

表1 佐藤駒次郎宛書信(一覽)

差出人	点数	No.	投函日	主な内容
田中 良 (1884-1974)	20	1	大正 12. 9. 27	関東大震災見舞いへの礼状、到来物への礼状、舞台下絵用資料、踊の舞台美術や道具、衣裳に関する打合せ、観劇の感想や近況報告、戦局から「浪花踊」自粛を考える内容の手紙
		2	2. 7. 12	
		3	2. 10. 4	
		4	3. 3. 12	
		5	4. 3. 4カ	
		6	4. 4. 15	
		7	4. 5. 30	
		8	5. 4. 14カ	
		9	6. 4. 16カ	
		10	6. 10. 15	
		11	昭和 7. 4. 29	
		12	8. 9. 4	
		13	8. 9. 8	
		14	8. 9. 20	
		15	8. 12. 4	
		16	9. 2. 2カ	
		17	9. 4. 13	
		18	9. 4. 28	
		19	13. 1. 30	
		20	13. 1. 31	
半井桃水 (1861-1926)	1	21	大正 13. 12. 15	自作の歌「山色達天」
岡 嘉太郎(鬼太郎) (1872-1943)	6	22	昭和 2. 6. 12	舞台写真、招待券、番組、歌詞などの送付に対する礼状、挨拶状
		23	2. 8. 31	
		24	3. 3. 28	
		25	4. 5. 12	
		26	3-5. □. 27カ	
		27	大正カ 15. 4. 28カ	
木村富子 (1890-1944)	6	28	昭和 8. 12. 30	謝金への礼状、歌詞の打合せ、作歌上の問い合わせ、木村富子が執筆した雑誌贈呈の挨拶状、献本への礼状
		29	9. 12. 17	
		30	12. 1. 21	
		31	12. 1. 28	
		32	12. 2. 10	
		33	12. 5. 21	
遠山静雄 (1895-1986)	1	34	昭和 12. 2. 16	舞台照明打ち合わせに関するもの
小山内薫 (1884-1950)	3	35	大正 13. 6. 14	築地小劇場開場や演目の通知
		36	13. 7. 11	
		37	13. □. 19カ	
長谷川小信 (1881-1963)	1	38	昭和 8. 12. 7	京都からの便り
食満南北 (1880-1957)	2	39	昭和 9. 1. 2	年賀状と礼状
		40	12. 5. 14	
須藤五郎 (1897-1988)	2	41	年月未詳. 9	外遊見送りに対する礼状
		42	10. 9. 6	
Omichi某	2	43	大正 12. 2. 21	ドイツでの転居通知など
		44	12. 9. 11	
某	1	45	昭和 14. 10. 31	下関からの便り
(戦後の書信)	13	46	昭和 25. 1. 1カ	戦時中の疎開先への書簡(年賀状、見舞い等)駒次郎葬儀に際して遺族あての書簡、弔問名刺添え書き、駒次郎一周忌に佐藤家が出した挨拶状、一周忌、七回忌関係の書信、役者からの挨拶状
		47	□. 1. 29カ	
		48	□. 1. 30	
		49	25. 2. 27	
		50	25. 3. □カ	
		51	(25. 5. 4)	
		52	25. 6. 3	
		53	(26. 4. 3)	
		54	31. 4. 4	
		55	31. 4. 5	
		56	31. 4. 5	
		57	31. 4. 10	
		58	35. 11. 27	